
感情から生まれたモノ

麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感情から生まれたモノ

【Nコード】

N4338T

【作者名】

麒麟

【あらすじ】

原作設定で一護が高1の時。いつものように遊びに行った帰り道。夏梨はまた平和な明日がくると思っていた。けれど目の前が急に真っ暗になって。体調を崩す遊子。怪しい転校生。死神たちも動きだす。しかし一護は。妖狐僕SSの設定を若干含みます。カプは一（やや）織に恋ルキ。日番谷+（）夏梨ぎみ。二人は一応出会ってます（ここはアニメ設定）。だけどあんまり恋愛要素を組み込まないつもりです。

第一話 日常が終わった日(前書き)

暗い

くらい

暗い！

なぜだ

何故だ

なぜ、私がここにいなければならぬ

許さない

許してはならない

一族よ、忘れるな

我が悲願は一族の悲願

忘れるな

わすれるな！

私を甦らせるまで！！

第一話 日常が終わった日

~~~~~

夕方のチャイムが鳴る。鳴ったら帰る。学校にも、親にも言われること。そして、人通りが多いところをなるべく通って帰ること。

「じゃーなあ！」

「おー！また明日な！」

最後の曲がり角で友人と別れる。そのまま真っ直ぐ歩けば家だ。いつもの流れ。家に帰れば遊子がりビングから顔を出し、兄が二階から降りてくる。兄妹で夕飯の準備をしていると、父親が診察室から戻ってきて食事。テレビ見て、お風呂入って、宿題やって。そうして眠りについて。また次の日が始まる。

日々は同じで、違うもの。異なる刺激が毎日あって、健康で、それがどれだけ幸せなことか知っている。

泣かないで、なるべく心配をかけさせないように。

だから、目の前が真っ暗になったときは物凄く、驚いた。

時間になっても帰らない妹。不安で泣く片割れ。愕然とする父親。兄は走り、走り回る。

「夏梨、どこだよ……………！」

どんなに気配を探しても感じない。不安に駆り立てられて、残滓さえ見つからない。

もうすぐ時間だ。これで見つからなかったら警察に通報することになっている。

一護は歯を食いしばる。夏梨と最後に別れた友人は、あの角まで一緒だった。家まで数秒。その間に何があったたというのだろう。あんな目と鼻の先で、誰が。

見つからない悔しさと、気づけなかった悔しさと、休まず走り続けた疲労で、足が重い。

そこでふと、落ちきった視線をあげると道の真ん中に、黒髪の長い女性が立っていた。顔は暗くてよく見えないが、よく整った顔立ちをしている。手には、よく見知った

「それ、そのボールは……………」

「やはり、君の妹のものだったか」

「それをどこで!？」

「私の部屋の前に置いてあった。ちなみに、君の妹君とは面識はない」

「じゃあなんで……………?」

「ふん 敵対する『同族』からの宣戦布告だ」

「『同族』?」

二度、三度瞬きをしたら、ただティーン、ティーンと弾むボールしか残

つていなかった。

十歳の子供が自ら失踪するはずもなく、誘拐という形で捜査されることになった。しかし身代金の要求もなく、一晩が過ぎてしまった。遊子は体調を崩し、一護だけ普段通りに学校へ向かう。

『各地で同じように、男女問わず十歳前後の子供がいなくなっています』

『どのケースも犯人からの要求はありません』

『公にすることは出来ません』

『そうした子供は、残念ながら亡くなって帰ってきました』

『なるべく普段通りに過ごしてください』

『捕らえるため、誠意努力してはいきますが人命優先ですので、心苦しいのですが』

『お父さん、お兄ちゃん………寒いよ』

熱もなく、いきなり震え出した遊子は、家で寝込んでいる。二卵性とはいえ、産まれたときから長く離れたことのない二人だから、不安定なのだろう。

こんなとき、霊圧操作が苦手の不器用な自分が悔しくなる。

「グッモーニン!! イツチゴ~~~~っ……………お? え、ちよ、無視? 無視ですか?! なんか反応してえええっなんかイタイ奴になっちゃうじゃん!!」

「何言ってるんですか浅野さん。最初からですよ。というか、毎日毎日、朝からテンションがウザ高くて迷惑だよ」

「今日はいつにも増してキツイ!!! なんなんだよ」  
「ケイゴ」

心底呆れたため息をついて、ケータイから顔をあげた。

「妹さん二人、具合悪くなっちゃったんだってさ。家の診療所もいきなり休みにも出来ないから心配なんですよ」

「それならそーだと言ってくれりゃいいのによ〜……………」

「あのお、そんなの普段の態度が違うことから気づきなよ」

水色が啓吾をたしなめているはたで織姫とチャドが一護に近づく。

「遊子ちゃんと夏梨ちゃん、そんなに具合悪いの……………?」

二人と面識がある織姫は本当に心配そうにしている。チャドも夏梨にしかあつたことしかないが、普段と違いすぎる一護を心配そうに見つめている。

「ん……………ちょっと、な」

曖昧な答えを無理に笑つて言つた一護を、タツキは厳しい目で見ていた。

「ほおーら、席着きな。転校生を紹介するよー」

ガタガタと慌てて生徒たちは席に着くが、時期外れの転校生に首をかしげる。

「喜べ男共！ 凄い子が来たよ！」

一瞬にして色めき立つ。その筆頭は勿論、啓吾である。

「入っていいよー」

腰まで伸びた、真っ直ぐな黒髪。猫目のようにぱっちり大きい黒い目は、意思の強さを感じさせる。身長は165cmぐらいだが、華奢な雰囲気醸し出されていた。

『おおお~~~~!!』

「男子ちよつと黙んな！ ほら、自己紹介」

越智にチョークを手渡され、瞬踏した後、達筆な字を書いていった。

【白鬼院 亜李羅】

「しらきいん あいら」

「……………それだけ？」

「それが？」

「まあいつか」

『（いいんかい!!）』

「んじゃ白鬼院の席は、派手なオレンジ頭の隣ね」

一護の左隣は、骨折のため入院中の生徒の席だったため、空いてい

た。

その席の周りはちょうど、女子ばかりであったため、一護に羨ましそうな視線が集まったのだが、特に気にすることも無い。もっと別のことが気になっていた。

(どっかで……見たか?)

白鬼院は無表情に椅子を引いて、一言、一護だけに聞こえるように放つ。

「昨夜ぶりね」

昼休み

織姫の誘いを冷たくあしらって白鬼院は教室を出ていった。それから少し置いて、一護はその後を追った。彼女はまるで元から知っていたかのように迷いなく、人があまり通らない場所へと進んでいく。

そして

「ここまで来れば、聞かれないわよね？黒崎一護」

「……………テメエ何者だ？」

二人の間に一陣の風が吹き抜ける。

白鬼院は、妖艶に笑った。

「私は【妖怪】よ」

白鬼院の姿が一瞬にして消えてしまった。

「なっ?!」

「目の前にまだいるわよ……………認めなさい。夢うつつの生き物である【妖怪】を。地獄へ行ったことあるのでしょうか？地獄の番人、クシャナーダを見たなら、他にも別次元の存在を認めることができるはず」

「認めろったって……………」

幼い頃に怖い話として、昔話として聞いていたそれらの存在は、枕元の寝物語にしかないものだと思っている。

「今の現状を否定するな！妹が戻ってこなくてもいいのか」  
「！！」

いなくなった夏梨  
不安定になる遊子

救う手だてが目の前にいる

ならば、どんなモノでも信じるしかない！

「その姿は

」

「じゃあ、五分後に」

全ての授業も終了し、帰宅する者、部活に行く者の声がざわめく教室で、白鬼院は一護に言った。声をかけるのをごとく無視して、去っていく。

「一護、帰ろうぜ！」

「悪いな。ちよつと寄るところなんだ」

「そう。じゃあ妹さんたち、お大事に」

「サンキユ。じゃーな」

背中を見せたまま、片手でヒラリと手を振った。

「んじゃ、井上さ〜ん！一緒に〜」あたしも用があるんだあ。ごめんね浅野くん。じゃあまた明日ね！」「」

織姫の後に続いて石田、チャドも出ていく。

「皆して、なんだよおう。って、水色もいねえしっ！」

こっそりと、水色も教室を出ていたのだった。

## 第二話 感覚全てを閉ざすモノ（前書き）

一護がちょっと性格違つかもしれませんが、続きで明らかになっていきます。

## 第二話 感覚全てを閉ざすモノ

「まったく黒崎の奴……………」

「まさか、夏梨ちゃんがいなくなってたなんて……………」

異変に気づいたのは織姫だった。

二人のことが心配でどんなお見舞いの品を持っていこうかと、具合の程度を知るのに霊圧探知を行った。しかし、一護の自宅には一心と弱々しい遊子のものしかなかった。驚いて集中して探してみたものの、全くひつかからない。休み時間中に石田やチャドにも声をかけて、三人がかりで探したのだが、かすりもしなかった。この街に、夏梨はいなかったのだ。

「……………あの転校生と顔見知りなもの、気になる」

「ああ。普通の人間よりはるかに希薄すぎる気配だ」

「あついたよ黒崎くん！と、……………白鬼院さん」

「つて車か！？」

黒い装甲の、外車と思われる車に、白鬼院に続いて一護も乗り込んだ。そして車は発進する。当然すぐにタクシーが捕まるわけもなく、そもそも一人暮らしの三人に、どこまで行くかわからない車を追いかけるなんて出来ない。

「この先はほぼ住宅街だったかな」

「えっああ！うん、そうだったね」

「じゃあ、僕は上から追いかけるよ」

そう言つて石田は勢いよく民家の屋根という屋根を飛び石のごとく渡つていった。

「……………隣町方面のようだな」

「いいなー石田くん。あたしも出来たらいいのになあ」

「……………やめておけ」

急ぎ足で駅まで走った。

『なんだ、この妙な感覚は……………?』

車が角を曲がる。石田も続けて曲がるうとしても、一瞬迷いが生じるのだった。

本当に曲がったか？

右か？

左か？

そもそも何を

追っていたのか？

足を止めてしまいそうにもなった。けれど、自分を頼りに追っている二人の霊圧が石田の理性を戻していた。

「くそっ！」

訳がわからなくなるこの不快感を拭う術を持ち合わせることはでき

なかった。  
左に曲がった車は、瞬きの間に気配さえも消えてしまっていたのだから。

「石田くん！」

「石田！」

電車とバスを駆使してなんとか石田がいるところまでたどり着く。学校から出て、10分くらいのことだった。

「……………見失ったのか？」

「わからない」

三人の横にあるのは、立ち並ぶマンションの間に、ぽかりと空いた空き地があるのみだった。

「黒崎の霊圧は、この空き地と道路を境に消えている。それこそ、忽然とね」

「どうして……………」

「原理はわからない。追っている時から変な感じがしたしね。……………空き地に入ってみただけ、普通の空き地のようだし。全く訳がわからない」

「どうして黒崎くんは……………相談してくれなかったのかな」

織姫の一言に、思わず口を閉ざしてしまう石田とチャド。言えない、言わない理由は織姫も薄々わかっているだろう。けれど、頼ってほ

しかったのだ。

「 命の保証が、ないからだろうね」

「 一護が、一人で背負おうとするのは、いつもそつだ」

「 ……………ん」

「 まあ、ここに入っていたのは間違いないんだ。待っていればいずれ出てくるさ。その時に吐かせれば……………」

その時、空から声がした。

「 石田！茶度！」

「 阿散井くん?!」

「 阿散井……………」

「 井上！ 全くなんだってこんなところに。探したぞ」

「 朽木さん……………」

「 なんだあ、お前ら？三人して辛気くせえ顔しやがって。つか、一護はどーした」

「 その黒崎を追っていたんだよ」

そうして、石田は今日あったことを簡単に説明した。

「 そうか……………」

「 ケツ！まーた一人で抱え込んでんのか。いい加減馬鹿じゃねーのか」

「 まあ、その馬鹿さが黒崎だからね。……………ところで二人はなぜここに？僕たちを探していたようだけど」

「 おう。実はな ……」

恋次とルキアの話によると、ここ最近のことなのだが、正体不明の『何か』の気配を感じると、技術開発局から情報があがった。さら

に詳しく調べてみると、その『何か』は人間や整、虚まで襲つていくというのだ。人間はすでに何人かは殺されており、整や虚も消滅しているのだとか。

「そこで私たちが第一先行部隊として派遣され、お前たちに何か知らないか聞きに来た、というわけだ」

「先行部隊………ってことは以前のメンバーが来るのか？」

以前のメンバーとは、恋次とルキアの他の、日番谷・乱菊・一角・弓親のことだ。

「そうだ」

「ともかく早々に『アタリ』をひいたな」

ばかりと空いた空き地は、広さが大体校庭を含めた学校ぐらいのものであった。この広さで放置されているなんておかしい。それに学校終わりの時間だ。小学校なら、高校より早く終わるのだから、小学生が遊んでいたっておかしくない。

車が消えてから10分が経った。

「お前ら、なんでここにいるんだ？」

「一護！」

「黒崎くん！」

「……………いつの間に、建物が」

空き地があったところには、いかにも高級そうなマンションが建っていた。

「何故ここに、はこちらの台詞だ。……………黒崎、君は何をしていたんだ」

一護は背を向けて歩き出す。振り返りもしない、立ち止まることさえも。

「何だっついていいだろ。お前らには関係ねーよ」

「何も知らないと思うなよ！君の妹が」

「だったら！」

石田の話を遮るように、仲間に対して苛立ちの声色を上げた。

「知ってるんだったら、それ以上言っな！」

「黒崎くん！」

悲痛な叫びに、織姫が重ねて呼んだ。

「あたし達じゃ力になれないのかな？ 朽木さんや阿散井くんは、今この近辺で妙な動きをしている気配があるから来てるんだって。ねえ、もしかしたら夏梨ちゃんとか何か関わりがあるんじゃないかな……」

「おい、一護。現世にいて全く霊圧も感じられねえことは、何らかの特殊な術だの施さねえ限り、あり得ねえことだぜ」

「……………そうだろうな」

「けどよ」

「触れねえ、見えねえ、声も聞こえねえ、匂いもしねえ、全く感じられねえ相手に、お前らはどうやって対処するってんだ？」



「姐さん……悪いっすけど、あんなんだけど一護が主人なわけな  
んで。話せねえっす。それに一護の妹らも、オレにとっても家族で  
……守んなくちゃいけネエ妹たちだ」

そう言っつて、砂ぼこりをあげながら走っつていっつてしまった。

第三話 模索する人間たち（前書き）

会話文が多いです？

### 第三話 模索する人間たち

「なるほど。そんなことが起きてたんっスね」

「浦原、白々しいぞ！……………どうせ貴様のことだ。知っていたのだろっ？」

「勿論っスよ！ 『何か』の行動も、夏梨サンがいなくなっただのも全部、ね」

扇子で顔の殆んどを隠して笑うような口調でも、目は鋭く、五人を見回していた。

「黒崎サンが言うようにその『何か』はアタシたちの五感や、第六感でさえも感じとることは出来ません。ただ……………」

「なんだ？」

「儂らが現世に来たときから『何か』が存在することは知っておった。じゃが今まで特に調べなかつたのはその『何か』はただ存在するだけじゃった。そう、ほんのちよつと人間に悪戯するぐらいのな。最初は気にはなっておったが暫くすれば何も感じず……………いや、思わぬようになつた。『何か』がいるのは『当たり前』のことになつておつたのじゃ」

黒猫姿の夜一が、重々しく言った。浦原や夜一さえも疑問に思わなくなつた『何か』は、一体どんな存在だと言うのか。

「もしかして、【概念】の問題なのかな……………？」

「ほほう。それはそれは、興味深いっスね、井上サン」

「井上、それはどういうことだ？」

「えっとね、ふと思つたことなんだけど……………」

視線が集中して、少し戸惑う織姫だが、意をけっして話始める。

「触れない、見えない、聞こえない、匂わない、感じられない。そして浦原さんや夜一さんも気にさせない『何か』………けれどそれは黒崎くんも同じだったはず。でも黒崎くんは、その『何か』に對峙する方法を手に入れた………そう、まるで決して掴むことの出来ない雲を本当は掴まれるんだって誰かに教えてもらったような

それが白鬼院さん」

「【概念】っスか………」

「なっなんか余計にややこしくしちゃったみたいですね………」

「いや、あながち間違っていないと思う」

普段は無口なチャドが、まるで自分に言い聞かせるように話し出す。

「朝見た一護はどこか不安定だった。動揺していたと言っても可笑しくない。来るときに何かまた絡まれたのかと思って、言ってくるまで黙っているつもりだった。だが、さっきの一護は 覚悟を決めた目だった。そもそもアイツは理想主義で現実主義だからな。決めたことは貫き通すし、突拍子もないことを初め半信半疑でも、自分自身が見て感じたものなら受け入れる」

どんなに靈絡を探っても掠りもしない妹の気配。その妹を探す手だてを提示したであろう白鬼院は『何か』を知っているのか、はたまた『何か』自身かもしれない。

「まっとにかくだ」

それぞれが思考の海に沈みかけたところで、浦原は扇子を音をたてて閉じた。

「アタシや夜一は方々手を尽くして調査を再開しましょう。他の皆さんは黒崎サンを注意して見ててください」  
「その白鬼院たる娘もな」

浦原商店を出る頃には、もう日が完全に落ちきって夜になっていた。

「朽木さんと阿散井くんは泊まるのはどうするの？」

以前ルキアは一護の家に、阿散井は浦原商店に居候をしたことがある。その阿散井は流れで一緒に外へ出てきているが。

「それは心配ない」

「近年の現世長期駐在が多くなってきてるし、他で駐在する死神からも部屋が欲しいと声が大きくなってな、各地に技術開発局が用意

した（作った）部屋が出来たんだ……… ったく、これで気まずい居候から解放されたぜ」

「特に空座町は人数も多いし、席次も高いからな。男性用と女性用と、広い部屋が用意されている」

が、二人はこれから見回りに出るといふ。『何か』の気配は夕方から夜半にかけてよく出るらしい。

夜空に紛れる二人が見えなくなつてから、三人はそれぞれの自宅へと歩き出した。

この日、虚は一匹も出ることなく朝を迎えた。

## 第四話 秘密を探索

「ねえねえ、白鬼院さん」

朝の下駄箱で、織姫とたつきは隣のクラスの女子たち三人に話しかけられている白鬼院を見かけた。その三人は女子の中ではとかく有名で、なぜ有名かというとかッコイイと言われる男子を端からロックオンして色々アピールして告白していくという子達だからだ。それくらいするのだから、外見は綺麗に清楚に着飾っている。その三人が顔をニヤニヤさせていた。

「白鬼院って、どっかで聞いたことあるんだよねえ」

「ネットで調べたらあ、出てきたよあ？」

「老舗の呉服屋さんだったってねえ。最近ではベビー服からシニアまで幅広く展開してるんだってねえ」

「前は鳳ほう葡萄ぶどう学園にいたらしいじゃない」

「そんなお嬢様がなんでこんな高校に転校してきたのあ？」

「前の学校で、なんか問題起こしちゃったあ？」

たつきが割り込もうと一歩踏み出した。

「愚か」

女の子たちのニヤニヤが止まり、一気に険しくなる。たつきも足を

止めた。

「なによその言い草」

「そうよ。ただ聞いただけじゃない」

「ほう。ならば先ほど君たちが放った言葉、口調を真似してあげましょうか？人を小馬鹿に貶めるような腐ったことを。いや、そうしたら私の口も魂の格も下がってしまうわね。やっぱり止めましょう。ごめんなさいね、君たちが言うように、私はお嬢様だから下品なことをしたくないの。                      それじゃあ、ご機嫌よう」

マシンガンのごとく決るような台詞を放って、呆然とする三人の横をすり抜け颯爽と立ち去っていった。

「白鬼院さん！」

たつきは白鬼院の机に両手を置く。その顔はとても晴れやかだった。

「下駄箱んトコ、悪いけど見ちゃったんだけど。アンタ、結構肝座つてんのね！」

「……………で？」

「いやさあ、アタシ、ああいう遠回しな嫌みとか嫌いだから、スツキリしちゃってさ。アンタに興味があるの」

「……………そう」

にこやかに話したつきとは反対に、白鬼院は無表情にため息をついた。

「私は君たちと馴れ合う気はないから、放っておいてくれない」

「え……………」

「この転校は一時的なものだし、君たちにも興味ないわ」

ハードカバーの書籍を取り出して、読みながら、読み上げるようにたつきの顔を見ることなく言った。

「……………そ。悪かったね」

たつきの手が離れて、別のところで会話している女子の輪に加わっていった。白鬼院は気にもせず、読んだまま。

「不器用だな」

そんな一護の独り言を、石田とチャドはジッと見ていていた。

放課後

別れの挨拶をして、一護は一人で教室を出ていく。一拍遅れて、何食わぬ顔で白鬼院も出ていった。石田・織姫・チャドも友人たちへの挨拶もそこそこに、後を追う。

二人は昨日と同じように裏門で落ち合ったようだ。一護はコンの本体を取り出して入れ替わる。そして何事か　　十中八九、自宅へ帰るようにだろう　　言っただけだ。コンの方は放っておいて、霊圧を隠しながら追尾していく。

しかし、何個目かの角で二人はパタリと姿を消してしまった。

「見失ったか」

「ごめんね……………」

「ケッ！コソコソ隠れる奴が悪りーんだよ」

「けどこんな状況が続けば何も始まらない。……………『何か』の正体がわからない以上、非常に痛いな」

恋次が口を開いた時だった。

ドオオオオン !

「なっ何！？今の音っ」

「山の方か！ルキア、行くぞ！」

「ああ。先に行かせてもらおう！」

「僕も先に行くよ」

恋次とルキアは瞬歩で、遅れて石田も後に続いた。民家の上を飛んでいく術がない織姫とチャドは家々の間を駆け抜ける。

「一護！」

「恋次、ルキア?!」

開けたところに、あちこち擦り傷切り傷焦げ痕がある一護と、同じように白鬼院がいたが、こちらは出血が酷い。辺りも木々が倒れ焦げている。

しかし攻撃をしかけているはずの敵らしきものがない。とりあえず事情と手当てをするために地面へと降り立った。

「おい一護、相手は」

「ばっ伏せるおおっ!!!!」

「「!!?」」

ドドドッ

ガキッ

恋次とルキアに向かって殺気を纏った刃らしき『何か』は爆風と共に迫った。なんとかギリギリ跳躍して致命傷は避けるものの傷はあちこちに出来ている。

叫んだ一護は斬月を前に翳して『何か』と刀を交えていた。

その間にも四方八方から爪のようなものややはり刃のようなものが二人を襲う。二人も斬魄刀で応戦するが、何分相手の姿も武器も見えないせいで傷が増えていく一方だ。かくいう一護はなんとか弾き返しているようだが、白鬼院が後ろで倒れているせいか大きく立ち回れないようだった。

「阿散井、朽木!どきなさい!」

「「!!」」

二人がいた辺り一帯に灰が竜巻を起こした。

「松本副隊長!ありがとうございます」

「いいのよ。そんなことより」

「本当に姿が見えねえのか」

「美しくないね」

「姑息な手え使いやがるな」

乱菊・日番谷・弓親・一角が降り立つ。周囲には乱菊の灰猫があるので見えざる敵も近寄れないようだった。

しかし

「みんなっ上っ！」

織姫の掛け声で一齐に飛びすさる。その一瞬で地面が大きくへこんだ。

「阿散井くん、後ろ！」

ザンッ

言われるがままに刀を振るうと、確かな斬りごたえが帰ってきた。

「あたった………！？」

驚愕に目を見開く恋次とルキアをよそに、織姫は隣のチャドに指示を出す。

「茶度くん真正面！」

「フッ！」

ドスッ

見事にヒットした音がする。

「見えるのか?!」

「うん。人よりも骨格が大きい………黒いモヤみたいなのが、20体ぐらい。今は離れて様子を伺ってるみたい」

「まさか現代に見えるヤツがいるとはな」

ゴッ

ドカツ

「チャド！」

殴られ吹っ飛ばされて木に叩きつけられる。そのままずると崩れ落ちた。織姫は気絶させられ、チャドを殴った男に担がれていた。

「襲われてた子供を庇って大怪我が。お前らしいが、一護はコレらと戦い慣れてないんだぜ。……あーあ、死神も来てるしょ」

赤銅色をした短髪の男は一護たちと同じ年くらいで、モスグリーンの学ランを着ていた。身長は一護とどっこいどっこいで、顔つきも勇ましく整った顔をしている。

「イイ男なのに、死神かあ………残念ねえ」

その隣には茶髪を大きくパーマにかけたニスボディの美女。自身の体つきがいかに魅力的かわかっているかの如く露出した服を着ている。しかし甘い顔つきと思いきや、スッキリと整っていた。こちらはやや歳上のようにだ。

「おいシロ、『ちよっと早い時間』だが、『アレ』やれ」

「煩い。わかつてる」

一護の後ろから聞こえたからには白鬼院が言ったに違いないはずなのだが、そこには何も存在しなかった。そして

バン

突如、周辺がオレンジ色に染まった。夕方になったのだ。

日は半分がすでに沈んでおり、影が濃くなっていく。周りにいるはずの仲間の顔が判別できないくらいに。

いや、本当に仲間だろうか

シルエットは見慣れた者たちだ

顔が見えない

誰だ、彼は

誰れぞ（だれぞ）彼

誰彼たそがれ

黄昏時

そこへ一陣の風が吹いて

もとの景色に戻ったときには、男女と一護と白鬼院、織姫がいなくなっていた。

## 第五話 八雲から一筋の光

「そういえば……石田は」

「そついやぁアイツ、どうしたんだ？」

「阿散井と朽木の後をすぐに追いかけていったんだが……」

「ここだよ」

茂みをかき分け、石田が現れる。

「すまない。怪我をした子供の治療をしていたんだ。だけ  
ど、興味深い話を聞けたよ」

服のあちこちについた葉っぱを払い落としながらそう言った。

「ひくく……えぐっ」

「他に怪我とか、痛いところはないかい？」

「ひくっ……ない、よ。ありがとう、おにいちゃん」

5〜6歳くらいの黒髪の少女は流れる涙を拭いた。

「何をそんなに慌てていたんだい？」

少女が走っていた方向から察するに、恋次やルキアが到着した辺り  
なのだがそれは隠して問う。いかにも逃げてきたという体ていというの

もわかる。もしかしたら感知できない『何か』が原因かもしれない、出来れば少しでも情報が欲しかったからだ。

「まっくるな、ツノみたいなのがある……おっきなのがきて……ちーちゃんをつかまえにきたの」

「それでどうしたのかな？」

「キレーなまっしるのおねえちゃんが、ちーちゃんのまえにいて、『逃げなさい！』って。ちーちゃんころんじやったけど」

「頑張ったね」

「またたすけてもらったの」

「……『また』？」

「こないだおにいちゃんが、まっくるい『オニ』からあかい『オニ』さんと、あおい『オニ』さんにたすけてもらったって、ゆってたから。おれいしたいけど、まだうごけないから、ちーちゃんがおにいちゃんのかわり」

「……そうか。でもその真っ黒い『オニ』はいるみたいだね。近づいちゃ駄目だよ」

「でも……ちーちゃんね、おれいのおてがみおいてきちゃったの。僕が探して渡してあげよう」

「ホント?! わたしてくれるの?」

「必ず渡そう。だから君も、もうここには来ないと約束できるかい?」

「できるよ!」

「じゃあ、最後に君のお名前は?」

「チヒロ!」

「さあ、チヒロちゃん。もう行きな」

「メガネのおにいちゃん、ありがとお!」

「……………というわけだ」

やや煤まみれになった、拙い字で書かれた手紙を拾い上げる。一生懸命書いたのだろう。手紙からはそんな思いが残っていた。チヒロという少女の兄の思念も入っているようだから、彼の手紙もあるのだろう。

「『オ二』……………『鬼』か」

「空想上の生物ですよねえ」

「美しくない容姿のね」

「変に混ぜつかえすな、弓親。……………しかし、『鬼』か。強そうじやねえか」

「でも、確かに織姫は角がある、とは言ったけれど『鬼』とは言っていないわ」

「……………兄妹と井上には見えて、しかしその両者にも若干の齟齬がある……………」

「日番谷隊長、一旦浦原さんとこに行きませんか？俺とルキアは怪我をこさえてますんで……………」

治療ができる織姫がいなくなってしまうので、恋次とルキアの怪我が放置されていた。酷い怪我はないが、じくじくとした痛みがある。

「そうだな。どうなっているかも聞きてえ。行くぞ」

「残念ながら、コッチはあまり進展ないっす」

カラリと軽く笑って言うものだから、全員が脱力してしまったのは仕方がないだろう。

「この浦原や儂の捜査を悉く跳ね返すのじゃ。ここまできると天晴れものじゃ」

夜一は平静と言うが、尻尾はびたびたとちゃぶ台を叩いているところから見ると、やや不機嫌なのだろう。なにせ夜一は今まで忍び込むことを失敗したことがないと言うのだから、そりゃ不機嫌にもなるうというものであった。

「まあ唯一言えることは、あそこに住んでいる者たちは悉く上流階

級の旧家であるということだけじゃ」

「現世での調査でもこんくらいっス。いやあ〜困ったもんっスよ。自信無くしちゃいますよ〜」

「笑って言うことか……………?」

皆それぞれ呆れ顔だ。日番谷がこぼしてしまうのも無理はない。

「いやあ〜！面白くて……………興味深いんスよ」

時折こうして鋭い、背筋が凍るようなことをするから、なかなかお腹の読めない男だと思っ。

「店長」

障子を開けたのはテッサイ。こちら表情が全く変わらない、違うタイプの腹の見えなさの者だ。

「どうしました?」

「あちらから緊急のご報告があるとかで取り次ぐよう申されました。皆さんもお呼びです」

「……………向こうでも『何か』あつたんスカねえ」

それは衝撃的なことだった。

「悪いな、井上」

「気にしないで！あたし一人暮らし長くて慣れてるから」

「そうじゃなくてさ」

「？」

織姫は野菜を切る手を止めて、壁に寄りかかる一護を見る。一護の目は真っ直ぐ織姫を見つめていた。

「黙ってたこととか……お前まで巻き込んだこととか、さ  
「だから、気にしないで？……あたしは、嬉しいから」

トントンとまた、リズムカルに野菜が切られていく。

「あたしは偶然に見えたからだけど、黒崎くんがなんで苦しんでいるのかわかったから。……………あの人達の気持ち、わかるよ。あたしもきつと、黒崎くんと同じことするな」

「……………そうか」

「そうだよ。あつ！お粥そろそろかな。持っていてくれるかな？」

「おう。ワリイな。サンキュ」

一人分の土鍋には卵粥が入っており、取り皿とレンゲを一緒に盆に乗せて二階へと上がっていった。

「治せなくて、ごめんね……………」

遊子は、著しく体調を崩していた。ほとんどの時間を寝て過ごし、起きているときもボンヤリとしている。寒がり、熱が時折上がった。単なる風邪ならよかったのだが、織姫の双天帰盾では治らなかったのだ。何かの影響を受けているとしか考えられなかった。

だからこそ、考えられることは一つ。魂の繋がりが一番強い双子の妹、夏梨がそのような状態なのではということ。

これは一護に伝えてあり、彼らも同じ意見だった。そして光明もあるとも。

夏梨はまだ生きている。

## 第六話 家族の心・仲間的心

「黒崎、井上さん」

教室の隅で話をしていた二人に、石田とチャドが近づいた。

「ちょっといいかい？」

視線だけを上に向ける。屋上には知った霊圧があった。

「……………ああ」

屋上には日番谷を先頭に、昨日集まったメンバーがいた。

「いい加減、吐いてもらうぞ。抵抗するなら拘束する」

「……………なんだ？焦るようなことでもあったのか？」

容赦ない日番谷のセリフに、流石に一護は目を見張った。

「……………二番隊長の碎蜂」

「……………」

「五番隊副隊長の雛森桃、六番隊隊長の朽木白哉、九番隊副隊長の  
檜佐木修兵を含む百名ほどが、姿を消した」

「はあっ?!ちよっ、冗談だろ?!」

「事実だ。昨日の夜半過ぎではないかと言われている」

「……………確かか？」

「その頃に、瀟霊挺を被う黒い霧が出現した。そして明朝に百名の所在が不明とまとまったんだ」

「黒崎、僕は昨日、あの山で『鬼』に救われたという兄妹と会った」

「やちるがね、やっぱり『鬼』を見たと言っつものよ」

「俺らも関係者だ。さっさと見えよ、一護」

「んなことでオメエと戦い（やりあい）たくねえよ」

「一護、井上さん。悪あがきは美しくないよ……………そこにいる彼女も」

「……………」

屋上の出入口の陰から白鬼院が出てくる。

「教えてくれないか、お前達や『鬼』のことを」

「……………」

「これは死神としてではなく、個人として頼んでいる」

「……………へえ？」

「いなくなつた五番隊副隊長は俺の家族だ。隊長がいない今、副隊長までいなくなるのは隊全体が困ることをアイツは嫌というほど解つている。苦しんだことを俺も知っている。責任感のある奴だからな。だからこそ解せない。それに」

「夏梨は俺の友人だ」

「……………ああ、そう」

「私達がなぜ一護に声をかけたか、解らないなら教えてやる」

長い髪が風に流されているが、絡まるようなことはなく幻想的なものだ。それを気にすることなく白鬼院は続けた。

「夏梨という娘が、無抵抗な子供だからだ」

一護と織姫以外が息を飲む。

「その兄である一護はたまたま力を持っていて、それが死神の力であっただけのこと。……まあ他にも理由はあるが。……だがいなくなつた死神はどうだ？無抵抗なわけがあるか。対抗しうる武器と教育と経験を積んでいるじゃないか」

「それは」

「それに、回りくどいぞ死神。それはお前もわかっているだろ。むしろお前は後半の理由に重きを置いているでしょうが」

「っ！」

「第一に」

「

カシヤン

「おい！」

白鬼院はフェンスの上に飛び乗り、全員を見下ろした。そして

「私達は、死神が嫌いだ」

背後に倒れていった。

すぐ下には、白鬼院の身体はなかった。

「何代も前に」

地面に視線を落としながら一護は語り出した。

「仲間の一人が死神の研究者に捕まって、命を玩ばれた（もてあそばれた）んだと。その仲間は何とか戻ってきたはいいものの、殆んど虫の息だったそうだ。そして命が尽きるとき

『正体を知られたら必ず殺しにくるぞ。気を許すな』

と言って死んだらしい」

「そんな、聞いたことないわ」

「そうだろうな。…………でもあいつらは、覚えてると言った。仲間の死の瞬間、慟哭、憎しみ、悔しさ、恐怖を、まるで自分が体験したように覚えてるってな」

「…………お前らは、俺達がそれをするとも思っただのかよ」

恋次の口調がキツくなる。共に戦った仲間裏切られたような感じがしたのだ。

「思うわけないだろ！んなこと、よくわかってるよ……………けどな、頼まれたんだよ。一番偉い人に、泣きながら頼まれたんだ……………」

「……………わかった。もうお前には聞かない」

「えっ隊長?!」

日番谷は身を翻した。

「一旦瀟霊挺へ戻るぞ」

「ええ〜っ?!」

「解錠」

乱菊の疑問符を無視して穿界門を開く。

「黒崎」

日番谷は少しだけ顔を一護に向けると、微笑んだ。

「決して危害をくわえないと、確約してやる」

「は?」

事態が飲み込めていない乱菊やらを引き連れて穿界門へと消えていった。

「なるほどね」

「なんだよ」

右手で眼鏡を押し上げながら石田は語った。

「何代か前に彼女らの仲間が実験台にされたというが、死神達は知らないと言っていた。それは『何か』を知らないと言っていたから裏付けはある。ということは研究者が秘密裏に行っていたというわけだ。しかし彼女らはそんなこと知らない。だからこそ信用がないならばやることは一つ」

「技術開発局、護挺十三隊、中央四十六室の代表者の署名を集めることだ。誓約書でもいい。要は危害を一切与えないということを」

「それは死神に有利になるんじゃないか？」

「まあね」

事が終わったあとで、そんなもの知らないと突っぱねてしまえばそれまでだ。

「だから何かしらその書面に、破った場合代表者が全体に何らかのペナルティが発動されるとかの術とかかけておくんだよ。それぐらい、向こうは朝飯前だろう？……………まあ、これをしなかつたら、僕は愚かだと言っけどね」

「なるほどな……………」

「それまでは、僕たちも聞かないことにする。が、以前から言っているように、僕は死神の仲間になったわけではないということだ」

「……………一護」

「わあってるよ。ただ、上手く話せるかどうかかんねえからよ、向こうに話がいっちなまつかと思ってよ言えなかったんだ」

長い話を一護は語り出した。時折織姫のフォローが入りながら。

## 第七話 深まる謎

静霊挺へ戻った日番谷の行動は早かった。

断界で石田が一護に言ったことを他の五人に伝え、抜けたらすぐに一番隊へ向かったのだ。

「この事態を収束させるには、彼らが必要です。しかし彼らは死神を恐れています」

「ふむ……………」

「双方への進言をお願いします」

中央四十六室と技術開発局のことである。

「そこまでするほどの者達なのか？」

「はい。実際に目の当たりにして、手に負えない存在だと確信しました。感覚全てを感知させない存在は、脅威になりえます。同じ存在だと認められる者も、酷い怪我を負っていました」

「なるほどの…………… あいわかった。なんとか今日中に取り付けよう」

「ありがとうございます」

「して、その間お主は何をしておる？」

「現在、共に向かった先見隊部下にいなかった隊長格の部屋を調べさせております。自主的になのか、拐われたのか…………… またその共通項も。この後すぐに合流するつもりです」

「全ての書状が得られ次第、お主に伝えよう」

部屋を出ると、乱菊から伝達用の地獄蝶がやってきた。今は六番隊隊主室にいるとのことだ。行儀は悪いが、欄干に足をかけて瞬歩で一番隊の大きな門まで降りた。いちいち人の出入りを確認しているので、何も告げずにそのまま出ると後でかなり面倒になるからだ。そうして出た後は跳躍だけで駆けていく。考え事をするのに一番楽なのだ。

「本当に今日中でできるか……………」

技術開発局局長は十二番隊隊長だ。文句が出るかもしれないが、総隊長には逆らえまい。

問題は、中央四十六室だ。あの堅物共がそう易々と答えを出すはずがないと思っ**て**いる。よくわからない自尊心プライドを守ろうとするだろう。あくまでも死神が優位ウイバでありたいと、またあると思っ**て**いるから始末に負えない。今回ばかりは、相手の方が優位であるのは明白だ**と**いうのに。

「……………考えるだけ無駄か」

これに関しては総隊長に一任した。ここでうだうだとしても声など届きはしないのだから。

「何か見つかったか？」

「あら、隊長。意外と早く」

「ここから先が長いだろうけどな」

「同感です……………で、どうよ恋次と朽木？」

ゴソゴソと引き出しを開けたり、あちこちをペタペタと触ったりしていた二人は乱菊の呼び声で顔を上げ、そろって困った表情をした。

「ダメっすね。不審なものは何にもないっす」

「強いてあげるならば、先ほどの雛森副隊長と同様に、ほんの僅かだけ残った霊圧の乱れぐらいでしょうか」

「そうか……………斑目と綾瀬川はどうした？」

「やちるにもう一度詳しい話を聞きに行きましたよ。……………まあまともに話が聞き出せるかどうかは」

「無理だろうな」

良くも悪くも、深くこだわらない十一番隊長副隊長だから、それに『鬼』を見たということ以上のことは聞き出せないだろう。まだ何も掴んではいけないのだから。

「とりあえず檜佐木のところに行きましょつか」

日番谷は小さくため息をついた。後手後手すぎて苛立ちを抑えたからだ。

檜佐木が最後にいたのは自室だったようだ。檜佐木の部屋は、現世の音楽機器や楽器ケースがあるが綺麗に整頓されていた。但し、文机以外だが。文机には書類が積まれていた。隊長業務とさらに滯霊挺通信の編集長も兼任しているから、三番隊や五番隊よりも忙しいのは明白である。それでもちゃんとこなしているのは責任感が強く

実力もあるからだ。勿論、他のいなくなつた隊長格もそれぞれがとも責任感が強く、誇りを持っている。だからこそ解せないし、異常事態でなりふり構つてなどいられない状況だ。

「……………なんだあ？これ」

その書類が沢山ある文机の上に一枚だけが、クシヤリと握り潰されていた。日番谷が開くと、それは隊長業務のものだった。

「あの檜佐木が書類を粗雑に扱つとは」

「不自然っスよ。ちよつと振り回しただけで小言を言う人ですからね」

「なぜ振り回すのだ貴様は」

どちらにせよ、関係ありそうな、なさそうな不自然さが見つかつて悩んでいると、慌てている霊圧が近づいてきた。

「阿散井副隊長こちらにいらつしやいましたか！」

「おう、理吉じゃねえか。どうした？」

「現在、現世への駐在任務についている内の百名の連絡が途絶え、霊圧も感知出来ない状況です！」

「んだと！？」

「各自！」

動揺しかけた部下へ鋭く日番谷は叫んだ。

「自隊に戻り混乱の収束及び情報の収集を。終了次第、十番隊まで来い！」

『はっ！』

その日の深夜

各隊から現世へ派遣されている全隊員百余名が消えた。原因は不明。偵察蠅からの情報を得ることはできなかつた。

「二百強、か……………」

いなくなったのがもうそれくらいになった。通常業務が滞り、なにより困ったのが現世の駐在任務だ。これは一番最初に現状を把握し、とりあえず代替りの者を送ったが、さらに業務が滞るといふ悪循環が起こっている。

「さすがにうだうだ言っている場合じゃないですから、早かったですね」

日番谷の執務机には連盟状が置かれていた。夜遅いが、一護へ連絡をとってこれを渡す手筈になっている。本音としては今すぐ行きたいところだが、信用を得るためには待つしかない。

もどかしい思いを抱えながら、明日もう一度現世へ向かう確認を行い、その場は一旦お開きとなった。

第七話 深まる謎（後書き）

伏線です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4338t/>

---

感情から生まれたモノ

2011年10月6日16時47分発行